

避難指示域 双葉町ルポ

測定器 針振り切る

ジャーナリスト

豊田直己さん

とよだ・なおみ 1956年生まれ。イ
ラク戦争、劣化ウラン弾問題などを取
材。著書に「戦争を止めたい」など。
ジャーナリストの見る世界



東日本大震災が福島第一原発を襲ったのは、私が事故発生から25年目のチェルノブイリ原発取材を終えて帰国した直後だった。チェルノブイリ(ウクライナ)での取材体験から日本がのびきならない事態に陥る可能性を直感「まさか日本で原発事故取材に出掛ける」と思いつつ、12日に福島県郡山市に入った。

翌13日、日本ビジネス・ジャーナリスト協会(JVJA)の仲間や写真誌「DAY S JAPAN」編集長の広河隆一さんと会流した。

検問なく

13日、日本ビジネス・ジャーナリスト協会(JVJA)の仲間や写真誌「DAY S JAPAN」編集長の広河隆一さんと会流した。

測定可能な放射線測定器を取り出すと、アラーム音を発しながらみるみる数字は上がり限界値の19・99を表示した。

「この数字はどのくらいレベルなんですか」と防護マスクでくもった声で聞いた。「おおよそだけと、普段の東京の数百倍かな」と答える。既にかなりの高濃度汚染地に

放射能測定が初めての仲間が入り込んでいた。

人けなく

「この数字はどのくらいレベルなんですか」と防護マスクでくもった声で聞いた。「おおよそだけと、普段の東京の数百倍かな」と答える。既にかなりの高濃度汚染地に

なかつた。そこで、もう一台の1000発射まで表示する測定器を取り出すと、これも針が振り切れた。

この事実を行政当局に知らせようとして、双葉町役場に直行した。役場玄関の扉は閉ざ

されたまま。緊急連絡先などの張り紙もなかった。静まりかえった町に、ときどき小鳥のさえずりが聞こえる。

餌やりへ

「長い時間はこの辺にいない方がいいですよ。気を付けてください」。そうお願いするしかなかった。

町内の道路をまたぐアーチには「原子力 郷土の発展 豊かな未来」との標語が掲げられていた。しかし、現実には未来を奪いかねない放射能の脅威に町はさらされていた。

ストレッチャーなどが放置された無人の双葉厚生病院。13日、福島県双葉町、豊田直己さん撮影。



も計測したことがない数値だ。向かったが、こも無人。玄

関には患者を運び出したとみられるストレッチャーが何台も散置され、脱出時の慌ただ

でも測定器の針は1000発射で振り切り、上限に張り付いたまま。そこで1000発射(1発)まで測定できるカイカーカウンターを取り出し

入院患者に被ばく者が出たと報じられた双葉厚生病院に

も計測したことがない数値だ。向かったが、こも無人。玄

関には患者を運び出したとみられるストレッチャーが何台も散置され、脱出時の慌ただ

でも測定器の針は1000発射で振り切り、上限に張り付いたまま。そこで1000発射(1発)まで測定できるカイカーカウンターを取り出し

入院患者に被ばく者が出たと報じられた双葉厚生病院に

も計測したことがない数値だ。向かったが、こも無人。玄

関には患者を運び出したとみられるストレッチャーが何台も散置され、脱出時の慌ただ

でも測定器の針は1000発射で振り切り、上限に張り付いたまま。そこで1000発射(1発)まで測定できるカイカーカウンターを取り出し

入院患者に被ばく者が出たと報じられた双葉厚生病院に